

富本憲吉・辻本勇コレクション

2018年度活動報告

1952年、京都市立美術大学教授であった富本憲吉（1886-1963）は陶芸を学ぶ学生たちのために教科書を書きました。それが『わが陶器造り』です。同書は、2013年12月に京都市立芸術大学が主催し京都国立近代美術館で開催されたシンポジウム「富本憲吉のことば」で再注目され、今回詳細な注釈を付した復刻版を2019年1月に里文出版から刊行しました。作陶から焼成、販売までのノウハウが詳細に記されたガリ版刷りの小冊子。そこには、富本の「陶芸家とはこうありたい・こうあるべき」という魂の叫びが宿っているようです。

本書には『わが陶器造り』の本文の他に、生前の富本を知る乾由明氏、柳原睦夫氏、森野泰明氏の鼎談（司会：本プロジェクトリーダー森野彰人）を掲載。大学での授業の様子など様々なエピソードが語られます。そして、芸資研非常勤研究員の前崎による小論「教育者としての富本憲吉」も巻末に収録。芸術家ではなく大学教授としての富本の一面に迫っています。

かつて富本憲吉記念館として公開されていた奈良県安堵町にある富本憲吉の生家は2014年に閉館し、2017年1月にホテル「うぶすなの郷 TOMIMOTO」としてオープンしました。本プロジェクトではホテルからの全面的な協力を得て現地調査を行い、記念館からホテルへの増改築がどのように行われたかを確認。また、聞き取り調査から、宿泊客のニーズとして滞在時に富本の作品に触れたり、富本について学んだりする機会が求められていること、そして、この場所が地域の文化活動の拠点として期待されていることがわかりました。今後は芸資研としてどのようなサポートができるのかを検討し、富本の生家をよりよいカタチで存続させるためにホテル・地域との協力関係を構築していきます。

富本憲吉関連の資料収集は継続して行っています。洋画家白瀧幾之助（1873-1960）は富本の友人としてロンドン留学時に行動を共にしました。昨年、白瀧が所有していたと思われる写真アルバムが発見され、そこに英国留学時の富本の写真が数点含まれていることがわかりました。今後この資料の研究が進み、若き日の彼のロンドンでの生活が更に明らかになることが期待されます。1930年1月28日、富本が九州の長崎に滞在した際に濱田庄司（1894-1978）に宛てた書簡も、本学の芸術資料館のコレクションに新たに加わりました。波佐見を訪れた時の所感や、三川内で制作をする予定であると書かれています。

本年度は無事『わが陶器造り』を出版することができました。今後は既存の辻本勇コレクションにこういった新出の資料を加えて、アーカイブの拡充と資料についての研究成果の発表を進めます。

前崎 信也（芸術資源研究センター非常勤研究員）